

日本橋美人ブランドの心意気を支えるのが

伝統的な「粋(いき)COOL」の美意識です。

背筋をすっと伸ばした粋な女性は内面から輝き、凛とした気品が漂います。

江戸っ子の美学を継承する人形師辻村壽三郎氏に、

粋と、心も身体も美しい「日本橋美人」への思いを語っていただきました。

江戸っ子の粋の美意識

粋と

「日本橋美人」



人形師

辻村 壽三郎 氏

人形の「粋(いき)」

私 が人形を製作する時は、だいたい江戸の「粋」ということを意識しています。

若い頃は西洋人形ばかり作っていました。昭和四八年からNHKの人形劇「新八犬伝」の人形を手がけたおり「あ、自分は日本人だ」と意識しました。「水を得た魚」のように自分が蘇ることを感じ、それをきっかけに和人形を作り続け現在に至っています。

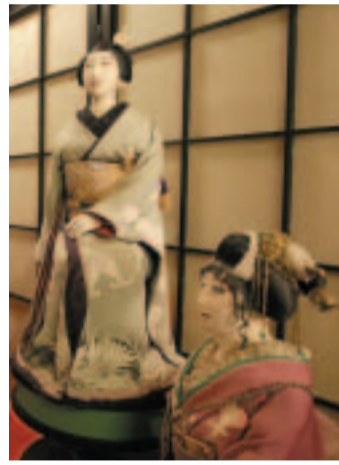
京都の人形には、着飾った舞妓の「ほんなり」といった雅(みやび)な風情があります。お雛さま一つとっても、京都の「雅」と江戸の「粋」とでは、こんなに異なるのかと思うほどそれぞれの違った良さが表れています。私の人形は、源氏物語を素材にしてもやはり「粋」になってしまいます。

美の表現

好

きな映画監督に「道」で有名なフェデリコ・フェリーニがいます。私の公演にフェリーニが来てくれ、「弾猛で繊細なことが表現だ」と語った言葉は、当時の私には衝撃的でした。

人形は、内面を自分自身で語ることはできませんから、ボキャブラリー(言葉)を着せてあげること初めて見る人にかかるといえます。強い個性を表面の布が繊細



に表現するので

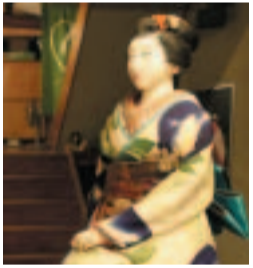
す。

泉鏡花が描いた人物であら

ば、彼の小説のボキャブラリー

を着せてあげま

す。帯に舞扇や笛を挿すことで、舞いや笛の名手だったというその人形にまつわる物語を伝えます。あるいは「歌麿」「広重」などの浮世絵をたくさん見て、いろいろ咀嚼しながら表現につなげます。そうすることにより人形は、その人物になっていくのです。



不思議なもので、顔に合わない着物を着せると人形が嫌だと怒ります。ですから人形と会話をしながら、気に入るように一枚一枚丁寧に重ねていきます。

人形の美しさの条件は「生き生きしていること」です。元氣であるということが存在につながります。そのためには「色気」が非常に大事です。やつれていくと色気なんて感じられないと思いませんか。媚を売るのではなく、生き生きとした強い存在感を示す人形の持つ色気からは「粋」というオーラが見えてきます。

お城下町の品格

江

江戸時代の日本橋界隈は、お城の下にある下町という本来の意味での「お城下町」おしろいしたまじいでした。物資輸送の水路を整備するなど江戸の基盤をつくった諸国大名は、町の格式の高さや品格を重んじました。日本橋の商人たちも、当然品格のある生きざまを持っていました。

商家の奥さまたちには「潔(いさぎよさ)」「思い切りの良さ」の美意識があったと思います。毅然とした自負心を持っていて、それが粋の一番大事な部分です。

その根底にある粋の美学というのは「潔さ」ではないでしょうか。それはあまり物事に執着しない、未練をとり去っていく思い切りのよい生きさまともいえます。いくら容姿が素敵でも、潔さのない女性私は醜いと感じます。こういう粋の美意識が、本当の日本橋美人をつくっていくのでしょうか。

Japan Beauty from Edo-Tokyo 日本橋美人ブランドを支える4つの美

「日本橋美人」の生き方を支えているのは、日本橋が江戸時代から育み伝承してきた美意識です。深い教養と研ぎ澄まされた感性を尊ぶ江戸っ子の叡智から、「心も身体も美しい」日本橋美人ブランドが誕生しました。凛とした江戸の美意識は、凝縮された四つの美として日本橋美人商品に受け継がれています。

洗練された仕草 **優** 江戸っ子の美意識 **粋**

日本橋美人 **美** from Edo-Tokyo

心も身体も美しく

伝統が培った技 **創** 美人からの叡智 **知**

Color of Japan Beauty from Edo-Tokyo 「日本の伝統色」より抜粋

- 美** ● 紅色 紅花から採った色素で染められた黄味の残った赤。江戸時代になって紅色と呼ばれるようになった紅は奈良時代から化粧料として用いられ、万葉集にも多く詠われている。
- 粋** ● 紺青色 濃い紺青色。続日本紀にある「金青」とは紺青のこと。更級日記に「ふじの山は(中略)赤ことなる山の姿の、こんじやうを塗りたるやうなるに」とある。
- 優** ● 鬱金色 うこんの根茎で染めた鮮やかな黄色。肌着や風呂敷または茶道具や着物を包むのに「うこん木綿」を用いた。
- 知** ● 若草色 若草のような新鮮な黄緑。草や木が萌えたつ色として古くは萌葱と呼ばれていた色である。若の形容詞がつく色は「若さ」を象徴する色。
- 創** ● 堇色 雛の花のような濃い紫。飛鳥時代の今の服色の深紫が、江戸時代に入り似紫と名を変え明治以後堇色といわれるようになった。

『日本橋魚市繁栄図』

歌川国安

日本橋魚河岸(魚市場)は日本橋・江戸橋間の北岸に設けられ、江戸の台所として賑わいました。その繁栄ぶりは「朝千両の商い」と言われ、芝居町(昼千両)、吉原(夜千両)と並び立つものとされました。歌川国安は寛政6(1794)年に生まれて39歳で早世しますが、美人画や役者絵を得意としました。この絵にも天禄棒に盤台(はんたい)を掲げて駆け出す棒手振(ぼてぶり)、腹掛けや赤欄に鉢巻を締めてきびきびと働く男たち、そして買い物客たちまで、それぞれ表情豊かに描かれています。魚河岸の人々は威勢がよくて義理堅く、強さをくじき弱さを助ける独特の気風があったと言われます。国安の視線は、魚河岸を支える人々に対して向けられていたようです。



日本橋美人ブランドの精神の根底にある創造の歴史を紐解き江戸の人々の美しさをあなた自身のものにしていきますか。

創る・日本橋美人

浮世絵師の技が伝える江戸日本橋

技を持った職人たちは時代の風を吸収しながら新しい伝統を創造してきました。

『初春の越後屋』

鳥居清長

呉服店の越後屋は駿河町一帯に広く店舗を構え、江戸一番の賑わいでした。この絵は寛政元(1789)年頃のもので、通りの両側は越後屋。遠くに小さく富士山が見えて扉が揚がる、新春の風景です。鳥居清長は日本橋材木町の書肆(しょし)「白子屋」に生まれてのちに浮世絵師となり、伸びやかな人物描写が特徴とされます。小顔でスラリとした独特の美人は、時代の明るい空気を映しているとも言われます。品性や知性を感じられる女性たちは、現在の目からしても魅力的です。流行の発信地であった越後屋の前を彼女たちがゆつたりと歩くさまは、日本橋が美人を育む地であることを示しているようでもあります。



『時代世話當姿見』横ぐしのおとみ

三代 歌川豊国

現在の日本橋人形町三丁目にあった玄治店(げんやだな)は、嘉永6(1853)年に初演された歌舞伎『世話清浮名横櫓(よわなざけうぎなのよこぐし)』の舞台として有名です。互いに死んだと思っていたお富と三郎が偶然に再開する場面、原作では「源氏店(げんじだな)」として鎌倉に置き換えられていますが、舞台はここです。この一帯にはかつて幕府お抱えの医師であった岡本玄治(げんや)の拝観屋敷があり、喧嘩から少し離れた落ち着いたある邸宅街でした。三代歌川豊国(歌川国貞)は79歳で亡くなるまで、役者絵を中心に一万点以上とも言われる膨大な作品を残しました。優れた表現力はこの絵でも発揮され、しっとりとした家並みの風情が湯上り姿のお富の粋さを際立たせています。



日本橋美人新聞 増刊弐号	
企画	日本橋美人推進協議会
発行	NPO法人 東京中央ネット
制作	株式会社 ヤマダクリエイティブ
協力	株式会社 乃村工務社
プロデュース	山田晃子 三輪祐児

『東都名所』日本橋雪中

歌川広重

歌川広重は寛政9(1797)年に江戸・八代洲(やよす)(八重洲)河岸の火消同心の家に生まれ、のちに浮世絵師となりました。『東都名所(とうとめいしょ)』は30代なかばで発表した作品で、優れた構図と精細な筆致は広重の名を大いに高めました。真白な雪につつまれて静かに佇む日本橋を、青い水面と冬の暗い空が引き立てます。京橋周辺に住んでいた広重にとって、江戸のシンボルである日本橋はなじみの深い自慢の景色だったことでしょう。風雅の代表たる雪を用い、江戸城と江戸の人々がよく愛する富士山を幻想的に配し、日本橋の最も美しい瞬間を描こうとした広重の思いが伝わってくるようです。



資料提供:(株)第一興商/(株)J・ストーリー Photograph ©2007 Museum of Fine Arts, Boston. All rights reserved. William S. and John T. Spaulding Collection, 1921 2.198342.15503-5 William Sturgis Bigelow Collection, 1911 11.295007.1.138973ac.114493

『富嶽三十六景』江戸日本橋

● 節 北斎

● 節北斎は宝暦10(1760)年に生まれ、20歳前後で世に出たのち約70年間にわたって活躍を続け、豊かな感性は海外にも影響を与えました。『富嶽三十六景』は70歳頃の作品で、この一枚は日本橋から西方を望んだようすです。川の両側に蔵屋敷が並び、前方に江戸城を望み、霞の向こうには富士山がそびえています。強度の遠近法により、橋上の賑やかさと整然とした町並み、そして富士山の遙かな姿が対比されています。各地から江戸湊(えどみなと)(隅田川沖)まで運ばれた物資は、小型船にて日本橋川沿いの蔵屋敷へと届けられます。日本橋は全国の物産の集約地として、経済や文化の面でも豊かな地となりました。



◆ 日本橋美人提唱者 山田晃子が語る日本橋美人ブランド ◆

「オーベルジュ」はフランス語で「食事のできる宿」の意味。訪れる人に癒しの空間を提供する「ホテルかずさや」だからこそ、ここでもてなされる「日本橋美人ランチ」の味わいには格別ものがあります。



日本橋本石町(現本町)の「上総屋旅館」も江戸時代から営業していた旅館のひとつで、現在は「ホテルかずさや」として、創業116周年を迎えた老舗ホテルです。四代目の工藤哲夫氏は、時を経て変わらぬホスピタリティを大切にするとともに、1Tを導入した新時代のホテルづくりを目指しています。一階に併設の南欧レストラン「オーベルジュ・ド・ニール」では「食」によって体内環境を整え、内面からの美しさにアプローチした「日本橋美人ランチ」を季節にあわせて開発しています。ビタミン、ミネラルのバランスに考慮したメインディッシュにスープ、サラダ、パケット、デザート付。美味しく食べて身体にも優しい料理を少しづつ多種類楽しみたい女性の心を満たしてくれまます。



日本橋馬喰町には関東郡代屋敷(のち御用屋敷)があり、年貢、治水、領民紛争の処理などを担当していました。訴訟などの関係で地方から出てくる人も多く、付近には公事人宿、旅人宿、百姓宿、さらにはオランダ商館長の定宿「長崎屋」などが立ち並び賑わいをみせていました。

オーベルジュ・ド・ニールヌ (ホテルかずさや)

shop data

- 日本橋本町4・7・15ホテルかずさや1階
- 営業時間 11時30分~16時17時~21時30分
- 定休日 日・祝日(土曜・要予約)
- TEL 03-67241-6840
- URL <http://www.h-kazusaya.co.jp>